2015.2.1　年間第四主日

# 汚れた霊に取りつかれた男をいやす

マルコによる福音 1:21-28

イエスは、安息日に(カファルナウムの) 会堂に入って教え始められた。人々はその教えに非常に驚いた。律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである。そのとき、この会堂に汚れた霊に取りつかれた男がいて叫んだ。「ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ。」イエスが、「黙れ。この人から出て行け」とお叱りになると、汚れた霊はその人にけいれんを起こさせ、大声をあげて出て行った。人々は皆驚いて、論じ合った。「これはいったいどういうことなのだ。権威ある新しい教えだ。この人が汚れた霊に命じると、その言うことを聴く。」イエスの評判は、たちまちガリラヤ地方の隅々にまで広まった。

## 説教

マルコの福音ではイエスのガリラヤ伝道ではいきなり悪霊払いから始まります。悪霊払い、横文字でいうとエクソシズムです。なんかおぞましく、おっかなくて嫌に感じる人もいるでしょうが、キリスト教ではこの悪霊払いは迷信ではなくいまでも大真面目におこなわれています。また、悪霊払いはキリスト教だけに特有の儀式ではなくキリスト教以外の多くの信仰、宗教にもあります。神社でのお払いの儀式や地鎮祭での神事なども悪霊払いの一種とも見ることができます。悪霊なんか非科学的だ、迷信じみていると思う人もいるでしょうが、いるいない、信じる信じないとあれこれ言う前に福音を聞いてみましょう。

イエスは安息日に会堂に集まっている人たち（ユダヤ教徒たち）に教え始めた、と始まります。聖書（旧約聖書です）の朗読の後、イエスは説教をしたのだと思われます。いったいイエスは何を言ったのだろう、どんな説教、教えを説い

たのかと知りたい気もしますが、マルコ福音書にはその説教の内容は記録されていません。マルコは説教内容については沈黙しますがこう書き記します。「人々は驚いた」なぜ驚いたか？その理由はこうです。

**律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである。1:22b**

××のようにではななく、権威ある者として教えた、このことに人々は驚いたのだとあります。マルコは律法学者といっていますが、ここの××を置き換えて学者、先生、政治家、有識者、牧師としてもそう意味はちがわないでしょう。ところで権威ある者とはいったいどのような意味なのでしょう。わたしはいろいろと考えていた（三日ぐらい）のですが、なんのことはない答えはきょうの第一朗読にありました。権威ある者とは預言者のことです。

**彼（預言者）はわたしが命じることをすべて彼らに告げるであろう。申命記 18:18b**

権威ある者とは人間によって権威を与えられ人ではなくて、神によって権威を与えられた人のことです。神によって立てられた預言者のことです。

権威とはいったいなんだろう、っていろいろ考えていたわたしは間違っていました。考えること自体は間違ってはいないのですが、その考えというのが世俗的なもの、つまり世俗的な権威のことばかりに思い煩い、神的な権威、霊的な権威ということをまったく考慮していなかった。神のことばを解説しよう、取り次ごうとしているのに前提となる態度が、心構えが世俗にどっぷりつかっていた、この点を大いに反省しました。

でも、なにもまどろっこしい言い方をしないで、ずばり預言者と書けばいいのにマルコはいじわるだとも思いました。性懲りもなく、そんな悪態を心の中でつぶやいたら、思い出しましたことがあります。

それは、今では人気のない解釈となっていますが「メシアの秘密」という解釈です。ヴェレーデという神学者が 1901 年に本を出版し展開した解釈です。ざっくり説明するとイエスは生前は自分がメシアだという自覚がなかった。

復活後の教会の信仰によってメシアとされた。後に教会が生前のイエスもメシアであったと考えるようになったとき、その証拠がなかったので（辻褄があわない）イエスがメシアであることは秘密にされたという説明をマルコは福音書で行った、とヴェレーデは考えた。きょうの福音箇所がまさに「メシアの秘密」の該当箇所の一つです。

イエスは自分がメシアであることを秘密にして会堂で説教した、聴いた人は権威ある教え（預言者のことば）に驚いた。まさにその時その場所に汚れた霊（悪霊）に取り付かれた男がいてイエスの正体を見破り叫んだ。

**「ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ。」1:24**

これに対してイエスが黙れと一括すると悪霊は退散し、それを目の当たりにした人々は二度びっくりすることになります。

ここでイエスが「黙れ。この人から出て行け」といったようすが優しいイエスさまのイメージと違うのであれこれ説明する人もいますが、このイエスの一括は悪魔にメシアの秘密がばらされては元も子もないので怒ったとすれば、すっきりとはいかないまでもなんかわかるような気がします。なにしろこれは伝道開始した直後の出来事です。

「メシアの秘密」にはもうひとつのユニークな見方があってそれは「弟子たちの無理解」というものです。会堂に集まった人たちは驚くことは驚きますが、イエスを理解したとはいえません。逆に悪霊のほうがすぐにイエスを理解し「かまわなでくれ」といっている始末です。もっとも悪霊は霊ですから霊的ににぶいわけがありません。霊的なイエスのことをすぐに理解できるでしょう。一方、人間は霊的に未熟です。なかなか霊のことはわかりません。人の目でイエスを見ることだけで、霊的な観点から、霊の目でイエスをみることができない。イエスをメシアとして感じることは現場にいた人にとって難しいことです。

聖霊で満たしてください、聖霊の息吹を注いでください、とわたしたちは祈ります、祈り続けています。それはわたしたちは霊的に未熟であり、その一方では、主につながることができなければ生きていくことができないという事実を知っている（理解している）からこそ祈ります。逆に言うと、わたしたちはすぐ悪霊に支配されてしまう事実がある、そのような人間だということです。

（世俗の事で）**思い煩わないで欲しい。一コリ 7:32a**

パウロはコリントの教会にあててこう書き始め、いろいろと生き方についての注文をつけます。そしてこのように結びます。

**このようにわたしが言うのは、あなたがたのためを思ってのことで、決してあなたがたを束縛するためではなく、品位のある生活をさせて、ひたすら主に仕えさせるためなのです。一コリ 7:35**

これはきょうの第二朗読の箇所です。表面的には独身の奨めと受け取るしかないようなパウロの手紙で、この観点からの批判も多々ありますが、パウロ発言の裏側にはパウロが受け取った霊の息吹を読み取ることができます。

わたしも洗礼者ヨハネの説明でイエスはヨハネと協力してことにあたればよかったのに…というようなことをいっています。世俗的な価値からイエスの地上の活動を批判する見方になっています。パウロ流にいうならば思い煩っているわけです。まったくもって、洗礼者もイエスも理解していません。

わたしたちは主のもとに集い、みことばに耳を傾け、神の霊を受け取ろうとしています。どうかこのわたしたちも思いを聞き入れてください。わたしたちが救いのみことばを受け取ることができますように。

---